

大学院教育改革支援プログラム主催 ランチョンセッション

「実務と研究を架橋する実践的地域研究者への道：ASAFAS で学んだことを生かす」

大学院教育改革支援プログラム主催のランチョンセッション「実務と研究を架橋する実践的地域研究者への道：ASAFAS で学んだことを生かす」が2009年3月8日に稲森財団記念館で開催されました。このプログラムは実務的マインドを持つ研究者、あるいは研究的マインドをもつ実務者を養成することを目標に2008年に新設され、本ランチョンセッションはASAFAS卒業生であり、現在、国際的な舞台で活躍する研究者・実務者と在学生のネットワーク形成推進を目的として開かれました。

ランチョンセッションの間は在学生在が卒業生へ現在の研究や仕事の内容などについて積極的に質問するなど、忌憚ない交流が見られました。また、セッション中盤にはタンザニアから招へいされた2名の卒業生が自身の研究や今後の展望などについて包括的な発表を行いました。

現在ソコイネ農業大学で研究員として活躍するステファン・ニンディ氏は地域の特徴・特色を正確に把握する上で、ASAFASで培った学際的研究やフィールドワークが重要であることを強調していました。また、それらを重視した自身の研究はさまざまな行政機関における政策立案に組み込まれていることをあげ、地域研究による実務社会への還元の一例を紹介しました。同氏は、最後に、地方自治体やNGOとのさらなる連携を強化していくとともに、タンザニアにおける大学教育の中でいかに地域研究のコンセプトを浸透させていくかを今後の課題・展望としてあげていました。

二人目の発表者のデイビット・ムハンド氏（現ソコイネ農業大学研究員）も自身の研究に即し、フィールドワークの有効性や日本での苦労話などについて、時折冗談を交え、報告しました。ムハンド氏は資料・文献のみを基にすすめる従来の研究だけでは地域の本当の姿を明らかにすることは難しいが、フィールドワークを重視することで地域の問題をより明確に浮き彫りにすることができるかと述べていました。また、同氏は日本留学中の苦労話の一つとして食事をあげ、生魚が苦手であることを指導教官であった掛谷誠教授（当時）に相談したところ、「私たちがフィールドにでたときには現地の人たちが食べているものをなんでも食べる。だから、君も日本にいるときには日本人と同じものを食べなくてはいけない。」といわれたエピソードを明かし、会場を沸かせていました。

ASAFASの特色でもあるフィールドワークを核とした地域研究は一見、どろくさい、実務の現場とは少し距離のある研究に思えるかもしれませんが、しかし、両氏や他の卒業生の話から、このようなどろくさい研究こそが地域の本当の姿、問題を明らかにしうるものであり、今後、実務の現場でより求められていくものであるだろうということを感じました。

藤田知弘